

「基礎看護」実習前後のイメージの変化：病院、患者、看護婦、看護のイメージ分析を通して

著者	板垣 恵子, 小林 淳子, 小山田 信子, 菊池 美恵子, 大桐 規子, 三国 真弓, 塩飽 仁, 伊藤 尚子, 佐藤 八重子, 作山 美智子
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	1
ページ	56-67
発行年	1992-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/33534

「基礎看護 I」 実習前後のイメージの変化

— 病院, 患者, 看護婦, 看護のイメージ分析を通して —

板垣 恵子, 小林 淳子, 小山田 信子, 菊池 美恵子
大桐 規子, 三国 真弓, 塩 飽 仁, 伊藤 尚子
佐藤 八重子, 作山 美智子*

東北大学医療技術短期大学部看護学科

* 東北大学医学部附属病院

The Differences of Images between Before and After the First Clinical Practice: An Analysis of the Images of Hospitals, Patients, Nurses and Nursing

Keiko ITAGAKI, Atsuko KOBAYASHI, Nobuko OYAMADA, Mieko KIKUCHI,
Noriko OOGIRI, Mayumi MIKUNI, Hitoshi SHIWAKU, Hisako ITO,
Yaeko SATO and Michiko SAKUYAMA*

Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University

**Tohoku University Hospital*

Key words: 病院, 患者, 看護婦, 看護, イメージ

A questionnaire investigation was made on 78 first grade students in Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University. It was performed to examine the differences of images of hospitals, patients, nurses and nursing between before and after the first clinical practice.

1. Regarding the images of hospitals, before the practice, the students had already had good ones. After the practice, they still have the good images that hospitals are well-equipped and trustworthy, except for the respects of cleanliness and well-orderedness.
2. Before the practice, the students had the images that patients are fastidious, self-centered, and unkind, but, after that, they have come to think that they are persevering and kind.
3. With respect to nurses, the students have already had from before the practice the images that they have to be equipped with intellectual ability, responsibility and physical strength. After the practice, the images of "fine" and "angelic" are also added on.
4. The students' images is invariant before and after the practice that nursing is keeping patients safe and at ease by skillful arts and setting patients at ease by both putting themselves in their places and obtaining their informed consents.
5. The students' good images for patients and nurses have grown deeper after their practice.

はじめに

最近の学生は何を考え、何を求めているのか理解し難いといわれる。そのような学生達は看護にどのようなイメージを抱いて看護学科に入学するのであろうか。

看護に対して一般的に「ナイチンゲール」と「白衣の天使」というイメージがあるが、現実の看護職は「きつい」、「きたない」、「危険」の3Kであるともいわれており、学生達は看護職に期待を膨らませることができず将来の職業として迷いがみられる¹⁾。

しかし臨床実習にでて患者にケアを実施し、患者から「ありがとう」という言葉をいわれた時、学生達の表情が生き生きと変化し、その後の看護行動にも変化がみられる。

看護行動はイメージに依存しており、イメージが変わればそれに応じた行動をするようになるといわれている。

そこで今回看護教育の立場から、本学看護学科1年次学生を対象に、「病院」、「患者」、「看護婦」、「看護」の4つの概念について、どのようなイメージをもっており、どう変化するのかを、「基礎看護Ⅰ」実習の前後に調査したので、その結果を報告する。

調査対象と方法

1. 調査対象

平成2年度入学の東北大学医療技術短期大学部看護学科1年次学生78名を対象とした。

2. 調査期日と調査回数

平成2年7月14日（基礎看護Ⅰ実習直前）と平成2年7月21日（基礎看護Ⅰ実習直後）の2回にわたり調査を行った。

3. 調査方法

基礎看護Ⅰの実習前後に同じ内容でアンケート調査を実施した。

「病院・患者・看護婦・看護」のイメージについて質問紙を作成し、自己記入により回答を得た。ア

ンケートの質問項目は、名古屋大学教育学部教育心理学科作成²⁾の「病院・患者・看護婦の形容詞尺度」からそれぞれ10項目を選択した。さらに著者らは「看護」のイメージに関する概念10項目を追加した。各々の項目については、「まったく当てはまらない」、「ほとんど当てはまらない」、「やや当てはまる」、「かなり当てはまる」、「非常に当てはまる」の5段階の評定尺度とした。

4. 分析方法

5段階の評定尺度は、「まったく当てはまらない」、「ほとんど当てはまらない」、「やや当てはまる」、「かなり当てはまる」、「非常に当てはまる」の順に1点から5点を配点した。

平均値の差の検定はt検定を用い、学生個々の実習前後でのイメージの変化はウイルクソンの符号順位検定を使用した。

調査対象の学習背景と基礎看護Ⅰの実習内容

1. 調査対象の学習背景

4月の授業開始から約3カ月経過しており、一般教育科目、専門基礎科目（医学概論、解剖学、生理学、生化学、微生物学）、専門科目（看護学概論、基礎看護技術、基礎看護技術実習）の学習途中である。

2. 基礎看護Ⅰの実習内容

実習期間は、平成2年7月16日（月）から7月21日（土）までの6日間である。

実習目的は「基礎看護学の一環として学内で学習した看護の知識・技術を用いて患者に看護を展開し、患者、看護、病院などを理解する」である。

実習内容は、東北大学医学部附属病院の見学、外来での実習と病棟での受持ち患者の看護である。病院見学では、検査部、放射線部、薬剤部、分娩部の設備を見学し担当者より説明を受けた。外来での実習は、待合室で診察を待っている患者の様子、受付や待合室、診察・治療室などの外来の環境、医師、看護婦、事務職員などの医療チームメンバーの働いている様子を患者の立場に立って観察した。病棟実習は、病状が安定していてコミュ

ニケーションがとりやすい患者を選択して、1人の患者を2名の学生で受持ち看護を行った。

結 果

1. 病院のイメージ

病院のイメージ10項目について実習前後の調査結果は表1に示した。

実習前、「信頼できる」、「清潔な」、「設備の整った」、「広い」、「きれいな」の5項目は平均値が3.5以上であり、「信頼できる」、「清潔な」、「設備の整った」の3項目は平均値が3.8以上であった。これに

対して「行きたくない」、「痛い」、「近寄り難い」、「いやな」、「孤独な」の5項目は平均値が3.1以下であった。

実習後、「設備の整った」、「信頼できる」、「広い」、「清潔な」の4項目は平均値が3.5以上であり、「設備の整った」と「信頼できる」の2項目は平均値が4.2以上であった。これに対して「きれいな」、「いやな」、「孤独な」、「近寄り難い」の4項目は平均値が2.9以下であった。

「信頼できる」と「設備の整った」は、実習後平均値が高くなり推計学的に有意の差を認めた。ま

表1 病院のイメージ

項 目	実 習	選択枝別の選択者数							平均値	t 検定	ウイルコクソンの 符号順位検定
		1	2	3	4	5	不明	計			
信頼できる	前	0	1	25	36	16	0	78	3.9	**	
	後	0	0	9	43	26	0	78	4.2		
清潔な	前	0	7	21	27	23	0	78	3.8	**	*
	後	0	9	35	21	13	0	78	3.5		
設備の整った	前	0	4	27	25	21	1	78	3.8	**	*
	後	0	2	8	24	43	1	78	4.4		
広い	前	1	6	40	16	15	0	78	3.5		
	後	2	17	11	21	27	0	78	3.7		
きれいな	前	0	10	31	28	9	0	78	3.5	**	**
	後	2	22	36	15	3	0	78	2.9		
行きたくない	前	7	21	21	16	13	0	78	3.1		
	後	4	21	27	14	11	1	78	3.1		
痛い	前	4	19	34	15	6	0	78	3.0		
	後	9	15	25	28	6	0	78	3.2		
近寄り難い	前	8	30	23	12	5	0	78	2.7		
	後	8	30	26	10	3	1	78	2.6		
いやな	前	6	25	32	10	3	2	78	2.7		
	後	5	29	27	12	5	0	78	2.8		
孤独な	前	13	21	26	16	1	1	78	2.6		
	後	9	24	32	11	2	0	78	2.7		

選択枝1: 全く当てはまらない
 2: ほとんど当てはまらない
 3: やや当てはまる
 4: かなり当てはまる
 5: 非常に当てはまる

** p<0.01 * p<0.05

「基礎看護 I」実習前後のイメージの変化

た「清潔な」と「きれいな」は、実習後は実習前に比較して明らかに平均値が低下した ($p < 0.01$)。

2. 患者のイメージ

患者のイメージ 10 項目についての実習前後の調査結果は表 2 に示した。

実習前、「不安な」、「心細い」、「苦しい」、「寂しそうな」、「身体の弱い」の 5 項目は平均値が 3.6 以上であり、とくに「不安な」は平均値が 4.3 と最も高かった。これに対して「気難しい」、「自己中心的な」、「やさしい」、「不潔な」の 4 項目は平均値

が 2.9 以下であった。

実習後、「不安な」、「忍耐力のある」、「やさしい」、「心細い」、「身体の弱い」の 5 項目は平均値が 3.7 以上であり、「不安な」、「忍耐力のある」、「やさしい」の 3 項目は平均値が 4.0 以上であった。これに対して「不潔な」、「気難しい」、「自己中心的な」の 3 項目は平均値が 2.5 以下であった。

「不安な」、「忍耐力のある」、「気難しい」、「自己中心的な」、「やさしい」の 5 項目のうち「忍耐力のある」と「やさしい」の 2 項目は実習後平均値が明らかに高くなり ($p < 0.01$)、「不安な」、「気難

表 2 患者のイメージ

項目	実習	選択枝別の選択者数							平均値	t 検定	ウィルコクソンの符号順位検定
		1	2	3	4	5	不明	計			
不安な	前	0	1	9	33	35	0	78	4.3	*	**
	後	0	4	15	31	28	0	78	4.1		
心細い	前	0	3	19	32	24	0	78	4.0		*
	後	0	6	19	32	21	0	78	3.9		
苦しい	前	0	7	21	39	11	0	78	3.7		*
	後	0	3	29	36	10	0	78	3.7		
寂しそうな	前	0	3	33	32	10	0	78	3.6		**
	後	0	16	25	25	12	0	78	3.4		
身体の弱い	前	1	7	26	33	11	0	78	3.6		
	後	1	3	27	33	14	0	78	3.7		
忍耐力のある	前	2	13	33	26	4	0	78	3.2	**	**
	後	0	4	10	42	22	0	78	4.1		
気難しい	前	2	12	53	9	0	2	78	2.9	**	**
	後	11	36	30	1	0	0	78	2.3		
自己中心的な	前	4	24	39	10	1	0	78	2.7	**	**
	後	16	44	16	2	0	0	78	2.1		
やさしい	前	1	29	37	6	2	3	78	2.7	**	**
	後	0	0	22	33	22	1	78	4.0		
不潔な	前	10	32	33	3	0	0	78	2.4		*
	後	8	34	26	7	2	1	78	2.5		

選択枝 1: 全く当てはまらない

2: ほとんど当てはまらない

3: やや当てはまる

4: かなり当てはまる

5: 非常に当てはまる

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

しい」、「自己中心的な」の3項目は平均値が逆に低くなり推計学的に有意の差を認めた。なお「心細い」、「苦しい」、「寂しそうな」、「不潔な」の4項目は、ウィルコクソンの符号順位検定で有意の差を認めた。

次に患者のイメージのうち、とくに「やさしい」と「気難しい」の2項目についての関係は、実習前(表3)「やさしい」を肯定した45名のうち38名(84.4%)は「気難しい」を肯定し、実習後(表4)「やさしい」を肯定した77名のうち30名(39.0%)は「気難しい」を肯定した。また「やさしい」と「自己中心的な」の2項目の関連では、実習前

(表5)に「やさしい」を肯定した45名のうち31名(68.9%)は「自己中心的な」を肯定し、実習後(表6)は「やさしい」を肯定した77名のうち18名(23.4%)が「自己中心的な」を肯定した。

3. 看護婦のイメージ

看護婦のイメージ10項目について実習前後の調査結果は表7に示した。

実習前、「責任のある」、「判断力のある」、「知識の豊富な」、「大変な」、「身体の丈夫な」の5項目は平均値が4.1以上であり、とくに「責任のある」と「大変な」は平均値が4.7以上であった。これに

表3 患者のイメージ「やさしい」と「気難しい」の関連(実習前)

患者のイメージ		気 難 し い					不 明	計 (人)
		1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる		
やさしい	1. 全く当てはまらない	1						1
	2. ほとんど当てはまらない	1	4	18	6			29
	3. やや当てはまる		6	28	3			37
	4. かなり当てはまる		1	5				6
	5. 非常に当てはまる			2				2
	不 明		1				2	3
	計(人)	2	12	53	9		2	78

表4 患者のイメージ「やさしい」と「気難しい」の関連(実習後)

患者のイメージ		気 難 し い					不 明	計 (人)
		1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる		
やさしい	1. 全く当てはまらない							
	2. ほとんど当てはまらない							
	3. やや当てはまる		9	13				22
	4. かなり当てはまる	3	18	11	1			33
	5. 非常に当てはまる	8	9	5				22
	不 明			1				1
	計(人)	11	36	30	1			78

「基礎看護 I」実習前後のイメージの変化

表5 患者のイメージ「やさしい」と「自己中心的な」の関連（実習前）

患者のイメージ		自己中心的な					不明	計(人)
		1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる		
やさしい	1. 全く当てはまらない	1						1
	2. ほとんど当てはまらない	2	9	11	7			29
	3. やや当てはまる	1	10	24	2			37
	4. かなり当てはまる		2	3	1			6
	5. 非常に当てはまる		1			1		2
	不明		2	1				3
	計(人)	4	24	39	10	1		78

表6 患者のイメージ「やさしい」と「自己中心的な」の関連（実習後）

患者のイメージ		自己中心的な					不明	計(人)
		1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる		
やさしい	1. 全く当てはまらない							
	2. ほとんど当てはまらない							
	3. やや当てはまる	2	12	6	2			22
	4. かなり当てはまる	4	22	7				33
	5. 非常に当てはまる	9	10	3				22
	不明	1						1
	計(人)	16	44	16	2			78

対して「頭がよい」、「すてきな」、「天使のような」、「気が強い」、「意地悪な」の5項目は平均値が3.5以下であり、「天使のような」と「意地悪な」の2項目は平均値が2.9以下であった。

実習後、「責任のある」、「判断力のある」、「知識の豊富な」、「頭がよい」、「大変な」、「身体の丈夫な」の5項目は平均値が4.1以上であり、とくに「責任のある」は平均値が4.8と最も高かった。これに対して「天使のような」、「気が強い」、「意地悪な」の3項目は平均値が3.3以下であり、「意地悪な」は平均値が1.8と最も低かった。

「判断力のある」、「知識の豊富な」、「頭がよい」、

「すてきな」、「天使のような」、「身体の丈夫な」の6項目は実習後平均値が高くなり、逆に「意地悪な」は平均値が低く、実習前後で推計学的に明らか差を認めた。なお「責任のある」、「大変な」、「気が強い」の3項目はウィルコクソンの符号順位検定で有意の差を認めた。

4. 看護のイメージ

看護のイメージ10項目についての実習前後の調査結果は表8に示した。

実習前、「安心させる」、「安楽にする」、「患者の立場に立つ」、「熟練した技術」、「安全にする」、「説

表7 看護婦のイメージ

項目	実習	選択枝別の選択者数							平均値	t検定	ウィルコクソンの 符号順位検定
		1	2	3	4	5	不明	計			
責任のある	前	0	0	2	17	59	0	78	4.7		**
	後	0	0	0	17	61	0	78	4.8		
判断力のある	前	0	1	11	38	28	0	78	4.2	**	**
	後	0	0	3	21	54	0	78	4.7		
知識の豊富な	前	0	1	19	31	26	1	78	4.1	**	
	後	0	0	5	30	43	0	78	4.5		
頭がよい	前	0	7	39	23	9	0	78	3.4	**	**
	後	0	2	20	27	28	1	78	4.1		
すてきな	前	0	12	31	20	15	0	78	3.5	*	
	後	1	3	30	20	22	2	78	3.8		
天使のような	前	2	26	36	9	5	0	78	2.9	**	
	後	1	14	34	14	13	2	78	3.3		
大変な	前	0	0	2	15	61	0	78	4.8		**
	後	0	0	2	23	53	0	78	4.7		
身体の丈夫な	前	0	0	6	39	33	0	78	4.3	**	
	後	0	0	2	28	48	0	78	4.6		
気が強い	前	1	9	38	20	10	0	78	3.4		*
	後	1	14	28	28	5	2	78	3.3		
意地悪な	前	16	39	23	0	0	0	78	2.1	*	**
	後	27	38	11	2	0	0	78	1.8		

選択枝 1: 全く当てはまらない

2: ほとんど当てはまらない

3: やや当てはまる

4: かなり当てはまる

5: 非常に当てはまる

** p<0.01 * p<0.05

「説明し同意を得る」の6項目は平均値が4.2以上であった。これに対して「奉仕の精神」、「患者を管理する」、「医師の補助」、「患者の言う通りにする」の4項目は平均値が3.9以下であった。とくに「患者の言う通りにする」は平均値が2.5と最も低かった。

実習後、「安心させる」、「安楽にする」、「熟練した技術」、「安全にする」、「説明し同意を得る」、「患者の立場に立つ」の6項目は平均値が4.4以上であった。これに対して「奉仕の精神」、「患者を管理する」、「医師の補助」、「患者の言う通りにする」

の4項目は平均値が3.9以下であった。とくに「患者の言う通りにする」は平均値が2.8と最も低かった。

「熟練した技術」、「説明し同意を得る」、「患者の言う通りにする」の3項目は実習後平均値が高く、実習前に比較して有意の差を認めた。なお「患者の立場に立つ」と「医師の補助」の2項目はウィルコクソンの符号順位検定で有意の差を認めた。

次に「患者の言う通りにする」と「患者の立場に立つ」の2項目の関連は、実習前(表9)「患者の言う通りにする」を肯定した44名は全員が「患

「基礎看護Ⅰ」実習前後のイメージの変化

表8 看護のイメージ

項目	実習	選択枝別の選択者数							平均値	t検定	ウィルコクソンの 符号順位検定
		1	2	3	4	5	不明	計			
安心させる	前	0	0	5	31	39	3	78	4.5		
	後	0	0	6	19	52	1	78	4.6		
安楽にする	前	0	0	5	34	39	0	78	4.4		
	後	0	0	5	23	50	0	78	4.6		
患者の立場に立つ	前	0	1	9	26	42	0	78	4.4		*
	後	0	2	11	17	48	0	78	4.4		
熟練した技術	前	0	1	10	27	39	1	78	4.4	**	
	後	0	0	3	23	51	1	78	4.6		
安全にする	前	0	1	8	31	37	1	78	4.4		
	後	1	0	7	22	47	1	78	4.5		
説明し同意を得る	前	0	3	14	28	32	1	78	4.2	*	
	後	1	1	6	24	46	0	78	4.4		
奉仕の精神	前	0	6	20	28	24	0	78	3.9		
	後	0	7	18	23	28	2	78	3.9		
患者を管理する	前	0	10	28	22	18	0	78	3.6		
	後	0	11	25	20	19	3	78	3.6		
医師の補助	前	0	4	35	27	12	0	78	3.6		**
	後	0	12	30	20	15	1	78	3.5		
患者の言う通りにする	前	4	30	43	1	0	0	78	2.5	*	
	後	6	19	41	10	1	1	78	2.8		

選択枝 1: 全く当てはまらない

2: ほとんど当てはまらない

3: やや当てはまる

4: かなり当てはまる

5: 非常に当てはまる

** p<0.01 * p<0.05

者の立場に立つ」を肯定し、実習後（表10）は52名のうち51名（98.1%）が「患者の立場に立つ」を肯定した。

考 察

看護行動はイメージに依存しているといわれている。イメージの形成に臨床実習がどのような影響を与えているかをみるために、今回本学看護学科1年次学生を対象に「基礎看護Ⅰ」の実習前後のイメージを調査した。

病院のイメージとして、実習前「信頼できる」、

「清潔な」、 「設備の整った」、 「広い」、 「きれいな」の5項目は肯定する学生が多かったが、一般的に良いイメージとされる項目であった。逆に否定する学生が多かった項目は「行きたくない」、 「痛い」、 「近寄り難い」、 「いやな」、 「孤独な」の5項目であり悪いイメージとされる項目であった。若林ら³⁾は、看護学生は1年生の時点では、病院というものを傍観的立場で眺め、その実情を把握していないため比較的良いイメージを有していると述べている。今回の調査でも、学生は病院に対して良いイメージを持っていたといえた。

表9 看護のイメージ「患者の言う通りにする」と「患者の立場に立つ」の関連（実習前）

看護のイメージ	患者の立場に立つ						計(人)
	1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる	不明	
患者の言う通りにする	1. 全く当てはまらない				2	2	4
	2. ほとんど当てはまらない		1	5	9	15	30
	3. やや当てはまる			4	15	24	43
	4. かなり当てはまる					1	1
	5. 非常に当てはまる						
	不明						
	計(人)		1	9	26	42	78

表10 看護のイメージ「患者の言う通りにする」と「患者の立場に立つ」の関連（実習後）

看護のイメージ	患者の立場に立つ						計(人)
	1. 全く当てはまらない	2. ほとんど当てはまらない	3. やや当てはまる	4. かなり当てはまる	5. 非常に当てはまる	不明	
患者の言う通りにする	1. 全く当てはまらない		1		1	4	6
	2. ほとんど当てはまらない			6	5	8	19
	3. やや当てはまる		1	3	11	26	41
	4. かなり当てはまる			2		8	10
	5. 非常に当てはまる					1	1
	不明					1	1
	計(人)		2	11	17	48	78

「病院」のイメージを実習前後で比較してみると、「清潔な」と「きれいな」は実習後に肯定する学生が減少した。肯定した学生では「やや当てはまる」が増加して、内容的には肯定する程度が弱くなった。これは今回実習を行った病院の建物が古かったことがイメージの変化に作用したと考えられた。一方「設備の整った」と「信頼できる」は、実習後肯定する程度が強くなった。これはMRIなど最新の医療機器の設備を見学し、薬剤部や検査部などでオートメーションシステムを見学したこと、また担当者から説明を聞いたことが影響したものと考えられた。

「広い」、「行きたくない」、「痛い」、「近寄り難い」、「嫌な」、「孤独な」の6項目については、実習前後でイメージの変化はみられなかった。

以上のことから、基礎看護Ⅰ実習を通じて「清潔な」と「きれいな」を除いた他のイメージは、病院に対する良いイメージとして維持されたと考えた。

患者のイメージとして、実習前は「不安な」、「心細い」、「苦しい」、「寂しそうな」、「身体の弱い」を肯定した学生が多く、患者は精神的な苦しみをもっているというイメージが強かった。また「気難しい」、「自己中心的な」、「やさしい」の3項目

については否定した学生も多かった。

「やさしい」と相反するイメージである「自己中心的な」と「気難しい」の関連では、「やさしい」を肯定した学生の 68.9% は「自己中心的な」を、84.4% は「気難しい」を肯定していた。すなわち学生には相反するイメージが同時に存在していたといえた。

看護学生は臨床実習において、患者との人間関係に不安をもっている⁴⁾⁵⁾といわれている。今回の調査でも「やさしい」を否定し「自己中心的な」と「気難しい」を肯定した学生がいたことは、初めて接する患者との人間関係に不安を持っていたことが考えられた。

実習前後の患者のイメージの比較では、「身体の弱い」を除いた項目のすべてでイメージの変化が見られた。「忍耐力のある」、「やさしい」、「不潔な」は肯定する学生が増加し、「不安な」、「気難しい」、「自己中心的な」は否定する学生が増加した。とくに「やさしい」は実習前に否定していた学生のすべてが肯定に変化した。この理由として、第一に今回の実習では、比較的病気の経過が良好でコミュニケーションのとりやすい患者が選ばれたこと、第二は患者の闘病している姿を実際に見たことなどが考えられた。若林ら²⁾も、短大3年課程では、1年次から2年次にかけての患者イメージの変化は良い方向に変化すると述べている。

「心細い」、「苦しい」、「寂しそうな」、「不潔な」の4項目は、肯定から否定へ、否定から肯定へと両方向へのイメージの変化がみられた。これは学生が接した患者の病状や病室・家族の面会状況などの物的・人的環境の違いによって、学生のイメージの変化に差が現れたものと考えた。また患者に実際看護行為を行うことにより、実習前には明確でなかった患者のイメージがより現実的なイメージに変化して行ったものと考えられた。

看護婦のイメージとして、看護学生は患者や病院よりも看護婦に対して強い関心を持っている⁶⁾といわれている。

看護婦のイメージとして「責任のある」、「判断力のある」、「知識の豊富な」、「頭がよい」を肯定する学生が多く、学生はすでに看護婦には知的な

能力と責任感が必要であるととらえていた。実習後、看護婦の仕事を知ることにより看護婦のイメージを肯定する学生が増加し、「かなり当てはまる」、「非常に当てはまる」と答えた学生が多くなった。同様に「大変な」と「身体の丈夫な」は実習前後とも肯定する程度が強くなり、学生は看護婦の仕事には体力も必要であるととらえていた。

「天使のような」は実習前には「やや当てはまる」と答えた学生が多く、否定する学生もいた。最近看護婦という職業は3Kであるとか、人員不足などマスコミで取り上げられることが多く、それらの影響によって看護婦を漠然と白衣の天使としてとらえるのではなく、職業として現実的にとらえているためと考えられた。石塚ら⁷⁾の調査でも、「看護学生は看護婦を自由でスマートではないが、責任感が強く、重要で、価値があり、活気があり、安定していて望みがある職種であるとみている。」という結果がでている。しかし、実習後「天使のような」と「すてきな」を肯定する学生が増加した。このことは他の学生に比べて1年生はロマンチックに看護婦のイメージを抱いている⁸⁾といわれているように、患者のケアを行っている看護婦の姿を実際に見て「すてきな」、「天使のような」とイメージが変化したものと考えられた。

「責任のある」、「大変な」、「気が強い」の3項目では、肯定から否定へ、否定から肯定へと両方向へのイメージの変化がみられた。この理由として、学生が実習した病棟により看護の内容に違いがあったこと、実習場で接した看護婦の態度などに影響されたこと、学生の受けとめかたに差があったことなどが考えられた。

看護のイメージとして「安心させる」、「安楽にする」、「患者の立場に立つ」、「熟練した技術」、「安全にする」、「説明し同意を得る」の6項目は実習前から肯定する学生が多かった。これは基礎看護学の授業の影響によるものと考えた。実習後さらに肯定する程度が強くなったのは、実習を通してこれらの重要性を実感したためと考えられた。

「奉仕の精神」、「患者を管理する」、「医師の補助」の3項目は前述の6項目に比べると実習前後とも肯定の程度は強くなかった。これは前述の6項目

が一般的に肯定される内容であるのに対して、この3項目は肯定的にも否定的にも受け止められる内容を含んでいるためと考えられた。

「患者の立場に立つ」と「医師の補助」の2項目は肯定から否定へ、否定から肯定へと両方向へのイメージの変化がみられた。その理由として、患者の立場に立つことの重要性を再確認できた学生とそれができなかった学生がいたことが考えられた。また看護の役割には医師の補助を行うことと、自分の判断で看護を行うことの両面があることを実際に知ったためと考えられた。

「患者の言う通りにする」は、肯定した学生が最も少なく、肯定の中でも「やや当てはまる」の占める割合が高かった。「患者の言う通りにする」と「患者の立場に立つ」との関連をみると、「患者の言う通りにする」を肯定した学生も否定した学生も「患者の立場に立つ」を肯定していた。遠藤ら⁹⁾の基礎実習I前後の調査でも同様の結果を報告している。「患者の言う通りにする」は、患者の意に添うように援助するとか、何でも患者のいうままにするなど様々に解釈できるため、学生のイメージの解釈に相違があり、肯定する学生と否定する学生に2分されたものと考えた。

看護のイメージは、「患者の立場に立つ」と「医師の補助」を除いて、実習前のイメージが基礎実習Iの実習後も持続していると考えた。

看護学科1年生は看護の勉強を開始してまだ3カ月である。今後さらに学習と経験を重ねて行く中で看護のイメージの変化が生ずるものと考えた。

おわりに

基礎看護Iの実習前後における「病院・患者・看護婦・看護」のイメージの変化をアンケート調査し以下のことが明らかになった。

① 病院のイメージは、実習前から良いイメージを持っており、実習後は「清潔な」と「きれいな」を除いては良いイメージが継続された。

② 患者のイメージは、実習前「気難しく、自己中心的で、やさしくない」というイメージを持っていたが、実習後は「忍耐づよく、やさしい」と

いうイメージに変化した。

③ 看護婦のイメージとしては、実習前から「知的な能力、責任感と体力が必要である」ととらえており、実習後はそれに「すてきなと天使のような」が加わった。

④ 看護のイメージは、実習前から「熟練した技術を用いて患者の安全と安楽を保ち、患者の立場に立って説明し同意を得て患者を安心させる」というイメージをもっており実習後もそのイメージが持続した。

⑤ 基礎看護I実習前後を通して学生は、「病院」、「患者」、「看護婦」、「看護」に対して良いイメージを継続して持っており、とくに「患者」と「看護婦」については実習後良いイメージが強まった。

文 献

- 1) 金城靖子, 上江洲幸子, 新田美恵子ほか: 看護婦に必要な能力についての学生の認知(第1報)—学年, 入学動機, 適性観, 意志との関連—, 第12回日本看護学会集録(看護教育), 123-126, 1981
- 2) 若林 満, 水野 智, 佐野幸子: 看護職キャリア発達—看護学校入学1年後における看護環境認知の変化—, 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 37, 31-50, 1990
- 3) 若林 満, 佐野幸子, 水野 智: 看護学生の職業環境の認知—看護婦・医師・患者・病院に対するイメージの分析を通じて—, 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 36, 121-137, 1989
- 4) 波多野梗子, 森川チエコ, 小野寺杜紀: 看護学生の学習および看護職に対する態度の発達の变化, 看護教育, 23, 513-520, 1982
- 5) 松木光子, 丸橋佐知子: 看護観の形成と変容, 看護展望, 3, 43-54, 1978
- 6) 佐野幸子: 職業イメージ, 自己イメージ, 看護職キャリア発達研究(2)—2年次における看護学生の意識と行動の変化—, 看護行動研究会 名古屋大学教育学部産業心理学教室, 名古屋, 1990, P. 23~P36
- 7) 石塚百合子, 白佐俊憲, 木村泰子ほか: 看護婦イメージの研究, 看護教育, 23, 446-453, 1982
- 8) 謝花美佐子, 平良広子, 安里栄子ほか: 看護学生の看護婦イメージの学生別によるイメージの検討

「基礎看護 I」実習前後のイメージの変化

—動機と意志との関連性—, 看護教育, **25**, 89-94,
1984

についての考え方の変化—基礎実習 I でどう変化
したか—, 看護教育, **30**, 554-559, 1989

9) 遠藤英子, 後藤貞子, 谷口秋子ほか: 学生の援助